山形県白鷹町の農村における古桜の空間的景観的特徴

The Characteristics of the Spaces and Landscape of Old Cherry Tree in Agricultural Villages of Shirataka, Yamagata Prefecture

宮澤 泰子* 竹形 顕* 堀 繁**

Yasuko MIYAZAWA Akira TAKEGATA Shigeru HORI

Abstract : This study attempted to manifest spatial structure of agricultural villages in Japan, surveying cherry trees in Shirataka-town, Yamagata Prefecture as a case study. We focused on the style of planting and locations of cherry trees which have been existing there over 100 years and analyzed each characteristics. This study found out that most of cherry trees are planted on the small hills in lowlands, not as groups but as singles. Location's features are grouped into 3 categories; (1) Gentle slope (2) Small Hills and (3) Hillside of prominent ridges, and each group is found out to be located near the villages, rice fields, or roads. As a conclusion, locations of cherry trees are found out to be selected allowing for the following 3 elements; (1) Emphasis of spatial relationship with surrounding landform or topographic items, such as mountains, topographical characteristics, villages or roads, (2) Visibility from villages or rice field and (3) Prospects from cherry trees.

Keywords: cherry tree, rice field, village, road, landform, agricultural village

キーワード: 桜, 田, 集落, 街道, 地形, 農村

1. 研究の背景と目的, 方法

農村は、田、畑、川、人、集落など、それぞれが互いに関係し影響しあって作り上げられている一つの生態系である。しかし現在の農村整備は、例えば「田」など一つの機能だけを取り出してその効率化を図る観点のもとに行っているように思われることがしばしばある。一つの機能だけ取り出して考えるのでは、農村という複雑な系を適切に運営できない恐れがある。

農村でも近年では緑化植栽活動が盛んであるが、その緑化は、空間の中での他の地物との相互関係を十分検討せず、単純に多くの草木を植えればよいという考えが強いように思われる。峠の三本松や別れの一本杉のように、峠や道の分岐といった特徴的な地形や重要な場所との関係を持っていた農村の植栽がそのような文化的特性を無視して行われては、農村の文化そのものを破壊することにもなりかねない。

以上のように、農村整備、とりわけ農村の緑化植栽整備の現状への懸念が本研究の背景である。農村整備を的確に行うには、農村のそれぞれの要素が全体の中でどのような意味、役割をもっているのかを深く理解していなければならない。

そこで本研究は山形県白鷹町に残る古桜を対象に、古桜の立地場所の特徴や集落などとの関係を分析することで、古桜の農村内での空間的景観的特徴を明らかにしようとするものである。農村の空間構造に関し、堀(1998)は、微高地など重要な地形地物の強調明示に樹木を用いる事を指摘している¹⁾。

図-1 白鷹全体図

- ①美師桜
- ②釜の越桜
- ③子守堂の桜
- ④赤坂の美師桜
- ⑤殿入桜
- ⑥原のしだれ桜
- ⑦八乙女権まき桜
- ⑧神妙寺の桜
- ⑨十二の桜

*東京大学大学院農学生命科学研究科 **東京大学アジア生物資源環境研究センター

それぞれの桜の地形・地物
との位置関係

凡例

- ★ 桜の位置
- 桜のある集落の範囲
- 桜のある集落の田の範囲
- 道路（濃色は主要道路）

全ての図は

縮尺 S=1:15000

等高線は5m間隔
(着色は15m間隔)

0 150 300m

平場 緩傾斜地型

図一2 薬師ザクラ

図一3 釜の越ザクラ

図一4 称名寺弥陀堂のザクラ

図一5 十二のザクラ

平場
微高地型

図一6 八乙女種まきザクラ

図一7 子守堂のザクラ

図一8 赤坂の薬師ザクラ

図一9 殿入ザクラ

図一10 原のしだれザクラ

張り出し尾根部 中腹型

表－1 桜の基本情報

桜の名称	薬師桜	釜の越桜	称名寺の桜	十二の桜	八乙女種まき桜	子守堂の桜	赤坂の薬師桜	殿入り桜	原のシダレ桜
樹種	エドヒガン	エドヒガン	エドヒガン	エドヒガン	エドヒガン	エドヒガン	エドヒガン	エドヒガン	エドヒガン
樹齢*	約1200年	約800年	約330年	不明	約500年	約1031年	約970年	約682年	約500年
樹高(m)	10	20	15	不明	20	19	9	16	28
幹周囲長(m)	8.17	6	3.45	不明	4.45	7.15	6.1	6.6	5
存在の形態*2	単木	単木	単木	単木	単木	単木	単木	単木	単木
大地形での桜の立地場所	平場	平場	平場	平場	平場	張り出し尾根部	張り出し尾根部	張り出し尾根部	張り出し尾根部
微地形での桜の立地場所	緩傾斜地型	緩傾斜地型	緩傾斜地型	緩傾斜地型	微高地型	中腹型	中腹型	中腹型	中腹型
場所の状況*3 (桜の傍にある特徴的地物)	薬師堂	巨石	阿弥陀堂・墓地	なし	鮎貝城址・八幡神社	子守堂	石碑	(古峰神社)	小祠(お大日様・稲荷神社)
立地地形と場所の状況(図)

*1: 薬師桜、子守堂の桜、赤坂の薬師桜については、専門家の調査に基づく数値。他は、言い伝えに基づく数値である。

*2: 当該の桜の他に周囲に同じく樹齢100年以上の古桜がない場合は「単木」とした。釜の越では次世代の桜が、八乙女桜や十二の桜では他の桜が近くにあるが、近年植栽されたものであるため、数に入れなかった。

*3: 括弧内に記入してある場合は、それが桜のすぐ脇にあるのではなく、桜の下からは見えない斜面の上部にあることを示す。

この先行研究を踏まえ、本研究では、樹木の側から農村の空間を捉え直そうと試みた。

白鷹町を調査地とした理由は二点ある。

一点目は、日本の農村としての普遍性である。白鷹町は山形県南部の西置賜郡の北部に位置し、白鷹山の南西に開けている。長井盆地の北端に

あり、東を白鷹丘陵、西を朝日山地にはさまれ、中央を最上川が北上している。同町はこのような山間の平場を利用して稲作を中心とした農業生産を行う典型的な中山間農業地域である。また同町は、戦後の高度経済成長に伴い空間形態が大きく変化した首都圏とは異なり、昔の農村の空間形態を比較的良くとどめており、日本のもともとの一般的な農村といえる。このため、白鷹町という地域でのスタ

写真－1 薬師桜

写真－2 釜の越桜

写真－3 称名寺の桜

写真－4 十二の桜

写真－5 八乙女種まき桜

写真－6 子守堂の桜

写真－7 赤坂の薬師桜

写真－8 赤坂の薬師桜(集落の中から)

写真－9 殿入り桜

写真－10 原のシダレ桜

写真－11 原のシダレ桜(集落の端から)

表-2 桜の空間及び景観の状況

桜の名称				薬師桜	釜の越桜	称名寺の桜	十二の桜	八乙女種まき桜	子守堂の桜	赤坂の薬師桜	殿入り桜	原のシダレ桜		
桜が存在する空間の状況	集落内 の他の 地物と の関係	桜―集落	*1 距離(m)	— 35 240	40 195 605	75 115 980	83 325 593	25 255 600	15 125 270	10 250 400	25 200 460	40 90 315		
			指標	極めて近い	近い	極めて近い	やや遠い	近い	極めて近い	近い	やや遠い	極めて近い		
			比高(m)	— -1 -2.2	0.3 4.2 10.5	-1.1 -0.4 -23	2 -12.6 -33	9.5 7.8 0	5 9.4 10	6 6.3 3	3 14.9 15.5	9 13.2 9		
			指標*3	やや低い	やや高い	やや低い	低い	やや高い	やや高い	やや高い	高い	高い		
			仰角(°)	— 23 4	19 5.2 2.3	9.4 6.5 -0.6	10.7 -4.6 -4.5	42.6 4.8 1.3	50.9 10.3 5	62.9 4.5 2.4	33.4 8.1 3.6	29.4 16.5 4.1		
			指標*4	見上げ	やや見上げ	やや見上げ	やや見下げ	やや見上げ	見上げ	やや見上げ	やや見上げ	見上げ		
			距離(m)	80 430 880	180 715 1295	135 515 940	15 175 415	215 500 1200	195 610 1325	75 700 1100	75 570 1060	130 295 665		
			指標	やや遠い	極めて遠い	遠い	近い	遠い	遠い	極めて遠い	遠い	近い		
			比高(m)	2 11 22	2.5 20 31.3	-1 -9.3 -19	1 1 11	22 25 27	8 12 15	8 13 18	13 15 17	17 15 2		
			指標	高い	高い	やや低い	やや高い	極めて高い	高い	高い	高い	高い		
			仰角(°)	11 3.3 2.3	5.1 2.7 2.0	5.3 0.5 -3.3	44 39.7 3.4	9.4 4.4 1.9	6.3 2.4 1.2	16 2.2 16	19.4 2.8 16	13.2 5.7 13.2		
			指標	やや見上げ	やや見上げ	やや見上げ	見上げ	やや見上げ	やや見上げ	やや見上げ	やや見上げ	やや見上げ		
		桜―田	距離(m)	20	162.5	60	265	167.5	100	125	67.5	110		
			指標	極めて近い	近い	極めて近い	近い	近い	極めて近い	極めて近い	極めて近い	極めて近い		
			比高(m)	0.6	7	1.7	10.4	13	9.1	8	12.6	15.9		
			指標	やや高い	やや高い	やや高い	高い	高い	やや高い	やや高い	高い	高い		
			仰角(°)	35.2	2.5	1.6	2.3	4.5	5.2	3.7	10.6	8.2		
			指標	見上げ	やや見上げ	やや見上げ	見上げ	やや見上げ	やや見上げ	やや見上げ	見上げ	やや見上げ		
		景観の状況	桜―集落	桜―田	桜―道路	*5 可視・不可視関係	可視	可視	可視	可視	(不可視)*7	可視	可視	可視
						可視	可視	(可視)*7	可視	(不可視)	可視	可視	可視	可視
						可視	(可視)*6	可視	可視	(不可視)	可視	可視	可視	可視

*1: 図表内の三段になっている数値は全て、上から「桜から対象物の最近地点までの値」「桜から対象物の中心地点までの値」「桜から対象物の最遠地点までの値」を現す。中心とは集落の場合は四辻などであって、距離的な中央ということではない。田の場合はほぼ距離的な中心である。

*2: 距離に関する指標では、中心地点までの距離を基準に、0～150mを「極めて近い」、～300mを「近い」、～450mを「やや遠い」、～600mを「遠い」、～750mを「極めて遠い」とした。

*3: 比高に関する指標では、中心地点との高低差を基準に、～20m～10mを「低い」、～0mを「やや低い」、～10mを「やや高い」、～20mを「高い」、～30mを「極めて高い」とした。

*4: 仰角に関する指標では、中心地点からの仰角(俯角)を基準に、-10°～0°を「やや見下げ」、～10°を「やや見上げ」、～30°を「見上げ」とした。

*5: 表記は、可視の場合には「可視」、不可視の場合は「×」とし、「桜から対象地物の可視不可視/対象地物から桜への可視不可視」と並べて表記した。

*6: 道路からは桜の樹冠は見えるが、根元は見えない。従って桜の下に立つと道路を見る事ができない。

*7: *6と同じ。田から桜の樹冠のみが見える。桜の下からは田が見えない。

*8: 桜のある微高地の縁に列植されている杉に遮られて、集落などからは桜が見えない。戦後植えられたこの杉がなければ、相互に可視の関係が成り立つ。

ディから明らかにされる空間的特徴は日本の農村の空間文化の普遍的な特徴を示唆する可能性があると考えられる。

二点目は、農村の空間的特徴を強く残していると考えられる古桜の存在である。同町には古い桜の木が多く残っており、かつ樹齢が分散している。つまり白鷹町ではさまざまな時代に桜が植えられ、それが長い年月残されてきているのであり、これは地域の人々が桜の重要性への認識を共有し、それに基づいて植栽と保存を行ってきたことを示すと考えられる。そうであればこの桜の空

間的・景観的特徴を明らかにすることで、同町の農村の空間文化の一つの特徴が明らかにできると期待される。

以上の二点から白鷹町を調査対象地とした。

分析対象は、同町に残る樹齢100年以上の古桜とし、該当する全9本の桜(写真1-11)を抽出した。桜の存する集落の範囲は聞き取りをもとに特定した。分析の資料には、主に5千分の1、補助的に1万分の1の地形図、そして現地聞き取り調査の結果を使用した。

研究方法は次の通りである。1) 空間的特徴の把握のために、桜の立地する地形の定性的特徴を明らかにした。さらに各集落範囲内の居住地区としての集落(これより「集落」はこの居住地区の意味で用いることとする)・田・道路を桜と関連する地物として抽出し、桜と集落・田・道路との距離・比高・仰角を地形図より算出し、定量的に把握した。2) 景観的特徴の把握は主に現地調査によって、空間的特徴による類型別に桜と各要素との間の可視不可視の関係、集落・田・道路から桜を見た構図を明らかにすることで行った。

2. 桜の空間的特徴

(1) 分析対象の桜

桜の樹種、樹齢を調べた(表1)ところ、約1200年から330年と幅はあるが、全てエドヒガンであった。樹齢については、基本的に言い伝えに基いており、科学的に明らかとはいえない。しかし

特に樹齢が高いとされる薬師桜、子守堂の桜、赤坂の薬師桜の樹齢は専門家による調査で出された数値であり、かなり長寿の桜が残っているということがいえる。

一ヶ所にある桜の本数を調べた所(表1)、全ての桜は周囲に樹齢100年以上の桜のない単木であることがわかった。現在の植栽は列植にしる面的植栽にしる、多数の木を用いるが、これらの桜はいずれも単木であり、屋敷林のような物理的機能の存在というよりも、空間の中でなんらかの象徴的な意味を持っているので

図-11 釜の越桜の周辺地形の断面

図-12 八乙女種まき桜の周辺の地形の断面

図-13 殿入り桜の周辺地形の断面

はないかと考えられる。また、釜の越桜の隣には次代の子桜（樹齢100年未満）を植えてあった。これより、生命あるものはいずれなくなるが、別の木であってもその場所にその後も桜があってもいいと地域の人々が考えている、と考えられる。「樹木そのもの」よりも「そこに桜がある事」が重要とする、ものよりも空間的存在を重視する価値観を反映しているといえるだろう。

(2) 桜の立地場所の地形的特徴

各桜は白鷹町内に広く分散している（図1）。桜と集落の地形・地物との関係（図2～10、色が濃いほど標高が高いことを示す）を見ると、いずれの場合にも、桜は平坦地から立ち上がった尾根の稜線上ではない斜面に位置することがわかった。立地地形は、平場型（図2～6）、田と集落を囲む張り出し尾根部の尾根型（図7～10）の大きく2つに分類される。

平場はさらに、緩傾斜の途中にある緩傾斜地型（図2～5）と、平場の中の微高地に位置する微高地型（図6）に分けられる。また、尾根型はいずれもその中腹にあることがわかった。これらの型の模式図を表1に示した。この型による違いは景観に大きく影響するがそれは後述する。

(3) 桜と集落・田・道路との関係

桜と集落、田、道路との関係のほぼ共通している特徴は以下の通りであった。桜のすぐ近くに集落があり、その先に田が広がっている。道路は集落の中でも比較的桜の近くを通っている。桜の背後には常に山があり、そこから、桜、集落、田、と順に傾斜で低くなっていく。この関係が白鷹町の農村の空間構造の典型であると考えられた。

以上を、桜と対象地物との距離、比高（桜の地点の標高－対象地物の地点の標高）から定量的に把握した（表1）。以下では、各型ごとの距離や比高を、「最近地点の平均値-最遠地点の平均値」の形で表記する。

桜と集落との距離は、尾根型23-36m、緩傾斜地型66-604m、微高地型25-600mであり、桜と田との距離は、尾根型119-1038m、緩傾斜地型105-885m、微高地型215-1200mであった。集落に比べ田が遠いが、これは桜のそばに集落があり、その向こうに田があるのがどのタイプにも共通した基本構造であるためであり、特段田が遠いというわけではない。面的に広がる田は当然のこととして、集落との距離に平場型の2つで幅があるのは集落が広いため、山裾に立地する尾根型集落は狭い傾向にあるからである。つまり、各型とも、立地地形の特徴に合わせた形で桜と集落・田が近い関係を結んでいるといえる。

集落との比高は、尾根型6-11m、緩傾斜地型0.4-11m、微高地型10-0m、田からの比高は、尾根型12-13m、緩傾斜地型1-11m、微高地型22-27mであった。いずれも周囲の里山の高さに比べて、大変小さい。これは、水平距離だけでなく鉛直距離も大変近いことを示すが、要するに桜は田や集落にごく近い存在であると言える。なお道路も、桜との距離は尾根型93m、緩傾斜地型16m、微高地型168mであり、やはり桜の近くに位置していた。

各地形型の特徴的な例の断面図11-13（断面の平面上の位置は図1に示した）からも、集落や田と桜とが近くに集まり、桜は集落の近くで小高い所に位置していることが分かる。

(4) 桜の立地場所における他の地物の有無

桜の立地場所の状況として、桜の傍にある集落・田・道路以外の特徴的な地物を調べた（表1）ところ、十二の桜を除く全ての桜の傍に社寺や祠、墓、石碑、巨石があった。

桜とこれらの地物が置かれた時期の前後関係は、桜が先に植えられたのは薬師桜、子守堂の桜、傍の地物が先であるのが称名寺の桜、八乙女種まき桜で、他は不明であった。

地物が先である場合については、称名寺の桜は墓地にその家人が植えたもの、また八乙女種まき桜は、荒砥城主桑島和泉守が庭前に植えたものであるといわれている。この2本の桜の位置は他の地物の立地に従って決まったものであるといえる。桜が先であるものについては、薬師桜の傍の高玉薬師堂の建立は1503年、子守堂の桜の傍の子守堂の建立が1660年頃で、どちらも桜の樹齢と照らし合わせて桜が先であるといえる。

以上の通り、桜は一件を除き社寺などの地物が近くにあり、桜とこれらの地物は、先にどちらかがあるとその傍に後から他方が置かれる関係が見られた。同じ場所に置かれることによって、これらの地物と桜とは相互に影響しあい、地域におけるそれぞれの重要性はより高まることになる。また、大事なものが重層的におかれる事で、その場所が地域住民に強く認知されるようになっていくことが考えられる。このため、意図的に桜と他の地物を同じ場所に置くことが行われたと考えることができる。

3. 桜の景観的特徴

(1) 可視・不可視の関係(表1)

景観では、対象物が「見えている」ということが重要である。従って見え方の特徴について述べる前にまず、桜から集落・田・道路への可視・不可視を確認したところ、1件を除き全て可視だった。不可視の釜の越桜は近年その周囲に桜を列植してしまい、それが視軸を遮っているもので、もともとは可視であったと思われる。前述のように、近年の数量重視の植栽がこのように所にも影響を与えているのである。逆に、集落・田・道路からの桜の見えも、八乙女桜が周りの杉植栽のために不可視であったのを除いて全てが可視であった。このように、近年の植栽によって視軸が遮断されているものを除く全ての桜と集落・田・道路との間に、互いに可視という関係が成り立っていた。このことから、桜と集落・田・道路とが互いに見える関係は、偶然に生まれたものというより人々が意識的に作り上げてきたものと見ることができよう。

以下でそれぞれの具体的な見え方を分析する。数値指標として仰角を用いたが、目線の高さ（1.5mとする）から桜の樹冠の先端（標準樹高の15mを採用）を見上げた角度になるよう、 $\tan$ は「(比高-1.5+15)/距離」で算出した。以下では、集落や田の中心地点からの仰角を、「各型の中の最小値-最大値」の形で表記する²⁾。

(2) 集落・田・道路からの桜の見えの特徴

集落からの桜の仰角は、緩傾斜地型は $-4.6 \sim 23^\circ$ 、微高地型は 4.8° 、尾根型は $4.5 \sim 17^\circ$ であった。

図-14 平場緩傾斜地型のモデル

図-15 張り出し尾根部中腹型のモデル

緩傾斜地型で -4.6° となったのは、集落が緩傾斜地の桜より上部にあるため、 23° となったのは集落の中心が桜のごく近くに位置しているためである。これらは特殊な形であり、例外である。これを除くと $5\sim 7^{\circ}$ となった。これはすなわち、屋根の上に桜が見える形である。尾根型はそれより仰角が大きく、桜の上を見上げる形になる特徴を持つ。中でも特徴的な例として、尾根型で集落の中の最近地点からは桜への仰角が約 30° 以上、うち2件は 50° 以上であった。これは桜がオーバースケールとなり、集落の中からは桜が上から家に覆い被さるように見える。この場合には桜は、空間認識装置や、地形(集落のすぐ背後にある尾根)による囲まれ感を強調するものとしての意義が強くなっていることが考えられる。これは程度の差はあるが尾根型の集落から桜を見るときに共通した特徴であった。

田や道路からの見え方は型によって明確に分かれた。尾根型では、田から桜は仰角が $2\sim 6^{\circ}$ であった。これにより田と道路と集落、更に桜のすぐ背後の張り出し尾根とが一体になって見えた。

緩傾斜地型では仰角が田の中心からは約 $0\sim 3^{\circ}$ 、道路からは 2° 前後、道路が桜のすぐ脇を通る薬師桜では 35° あった。尾根型に比べて仰角が小さいのは桜の立地地形が違うためである。空間的特徴で述べた通り視点が桜より低く遠くなるため、手前に田、その先に桜、集落(または集落、桜の順)、その背後に連なる山稜とが一体となって広がるのがよく見えた(写真10)。この型は桜の周囲に高く立ち上がる地形や構造物が見られないため、桜が立ち上がって印象深く見えると考えられる。微高地型の八乙女桜は不可視だったが、桜が微高地の頂上部の端に寄っており集落や田、道路から印象的に見えやすい場所にあるといえるだろう。つまり、全ての型で桜は周囲から見上げられ、見えやすい形になっているということがいえる。

(3) 桜から田・集落・道路の見え方の特徴

前項との違いは構図であり、仰角や距離などは前項と同じ、あるいは裏返しである。こちらの構図の特徴は、盆地を囲む遠景の山が集落・田・道路と一体となって見えることである(写真4)。

いずれの桜においてもその一体感、佇まいは、きわめて安定感のある落ち着いた農村景観となっていた。これは、長い年月をかけて地域が育んできた景観と思われる。

(4) 「見える」ことの意味についての考察

以上より、桜と田・集落・道路との間には互いに良く見える関係が結ばれている事がわかった。従って、見えるということが何らかの重要な意味を持っていると考えることができるだろう。

聞き取り調査の結果、9本中全ての桜が昔から「種まき桜」の別名で呼ばれていた。これは従来、桜が咲くのを目安に稲の種を蒔いてきたことに由来し、桜と稲作の密接なつながりが分かる。

また信仰の面でも、日本の農村文化では、桜は田に豊饒をもたらす神が稲作期間中に宿る依代であるとする伝統がある³⁾。白鷹町では、同町の西にある葉山山頂に祀られている五穀豊穡の神、葉山権現が種まきの時期に山を下りて田の神に替わり、その時にエドヒガンの桜を依代とし、そのため人々は古くから桜の巨樹を保護してきたという言い伝えもある。こうして下りてきた神から

見える範囲の集落に幸いが、見える範囲の田に実りが授けられるのであり、また、集落や農作業中の田から桜が見えるということは、自分たちに神が富と幸をもたらしてくれることを日々確認できるということを意味すると考えられる。それゆえ、桜はよく見える所に植えられたと考えることができる。

4. まとめと考察

以上より、白鷹町の古い桜の木の空間的景観の特徴をまとめると、古桜は、①集落や田の近く、②尾根の中腹や開けた緩傾斜地の上部に、③単木で存在し、④集落や田からよく見え、時には後背の山と一体で見え、大変印象的な景観となっており、⑤桜の木の下からも集落や田が眺められ、落ち着いた農村景観を提供している、ことがわかった。分析対象の9件にこの特徴が共通していたので、白鷹町の農村にはこのような地物間の関係性が存在し、またそれが同町の美しい農村景観の一要素となっているといえるであろう。こうした空間的景観の特徴を尾根型と緩傾斜地型についてモデル化したのが、図14、15である。

なお、上記の特徴が特に顕著な例として、尾根型、特に子守堂の桜や赤坂の桜では桜が集落から距離15mと近く、仰角も 50° 以上で桜が集落を見下ろすようになっている。これは、神の依代としての桜が自分の集落に近く、よく見える位置にあってほしいという人々の意識が強く表われていると考えることができるのではないだろうか。

白鷹町の空間的景観の特徴については、前述①～⑤という物理的に表われてくる共通した特徴が認められ、更にそれがかなり顕著である地域がある。このことから白鷹町のもう一つの特徴として、①～⑤のように、他の地物、特に地形との関係を重視しつつ、景観を重視した空間づくりが伝統的に行われてきたということが出来る。白鷹町は日本の一般的な農村の空間を良く残しているため、ここで得られた特徴はもともとの日本の農村文化の特徴を示唆していると考えられる。つまり日本では古来より木を植える場合、地域の空間の中での他の地物との関係、特に地形との立地対応と、景観的な関係性が重要であったのではないかと推察できる。ただし今回の調査は白鷹町の9本の古桜という限られた対象について行ったものであり、日本の他の農村についても今後調査していく必要がある。

また、分析の章では触れていないが、原のしだれ桜は、最も見えやすい張り出し尾根の突端ではなくその側面にあり、これは桜がその集落だけから見え、それ以外の集落からは見えない立地になっているのではないかと考えられた。つまり、桜を依代とする神の恩恵が自分たちの集落だけに与えられるようにしていることが推測される。しかしこの点についても先に述べた通りまだ明らかではなく、今後調べていくべき課題としたい。

幸い近年では農村の美しさへの関心が高まっている。農村整備の際には本研究で知見として得られた①～⑤のような空間的景観の特徴が見直され、取り入れられていくことを期待したい。

補注・参考文献

- 1) 堀繁(1998): 景観用語事典: 彰国社, 126-129
- 2) 数値の取り方が2章と異なるのは、2章では空間的な広がり を明らかにすることを目的に、空間の範囲を求められる数値を用いたのに対し、ここでは景観を明らかにする目的で、各地物内で景観の視点となりやすい中心地点に特定してその数値を用いたためである。
- 3) 原敬一(1999): 山と川と桜-古典桜の里・白鷹町: 水酔 春号 8